2025年8月6日　水曜祈り会　　吉田真司

本日の学び　　テーマ:「神の宝の民」　テキスト:申命記7章6-15節

【理解の手がかりとして】

申命記７章 6-15 節は「民の選び」に関する箇所である。ここを読むと、主の選び、イスラエルに向けられたその愛のほどを感じる事が出来る。

しかし、その前後の箇所（7:1-5、16-26）を読むときに、そこにある他民族に対する取り扱いを知るに至り、それに挟まれた本課のテキストをどのように理解すれば良いか、悩ましくなるのが実際である。そこで、その前後のテキストを踏まえた釈義を試みるべく、その解釈の視点につき『旧約聖書を学ぶ人のために』（並木浩一／荒井章三編）から要点抜粋し、以下列挙してみる。■部分が引用部分。

■　「民の選び」とは、イスラエルという歴史的に存在した「民」が、自らを「主なる神に選ばれた民」であるとするアイデンティティーを支えた信仰である。

■　申命記７章は、初め（7:1-5）と終わり（7:16-26）において、約束の土地にいる先住民との契約（婚姻関係）を禁止し、先住民に対してきわめて排他的、戦闘的な姿勢をとることをイスラエルに要求する。今日、先住民の権利が確認され、先住民を征服してきた西欧諸国の「一神教」の排他性が厳しく非難されている中で、これはまことに読みにくい、躓きとなるテキストである。この躓きを安易に取り外し、問題がないことを装ってはならない。

では、どう読むか

■　申命記７章の中心にあるのは、主が契約に対して誠実な神であるということ、それに対してイスラエルも誠実に主の律法を守れ、ということ。そのために土地の住民とその神々の影響下に入らないこと、である。そして、諸国民の絶滅そのものが７章の目的ではない、ということ。

なるほど、確かに旧約聖書の信仰の中心は、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」（申命記 5:7／十戒第一戒）であり、出エジプトから始まる荒野の 40 年は、その神信仰への訓練の機会であったと理解する。それゆえ、カナンに入植する際の大いなる課題は、その土地の（先住民族の）異教信仰に影響を受けないこと、これが何よりの主の関心であった、ということである。

■　イスラエルが主に選ばれた民であるということは、約束の土地に対するイスラエルの特権を保障しない。むしろ、ここで言う選びは、その根拠をただ主の愛のうちに、また先祖たちとの約束への主の誠実のうちに持つのである。

「先祖たちとの約束への主の誠実」、そう、かつてアブラハムを祝福された主の約束、その約束は必ず果たすとされる主の計画の事柄として、このカナンの入植の出来事をとらえることは肝心である。そしてイスラエルに求められるのは、ただただ〈主の言葉への信頼〉（それはそのまま「信仰」）である。

■　イスラエルが選ばれるにふさわしい民であるがゆえに、その土地所有が正当化されるのではなく、資格のないイスラエルを主が選んだがゆえに、イスラエルはエジプトから解放され、土地に導き入れられたにすぎない。

■　イスラエルは、十戒をはじめとする主の律法に従う限りその地に住むことができる。この点では、実はイスラエルも他の諸国民も差別はない。イスラエル自身も、主の律法を守らない（信仰に生きない）ならば、「あなたも同じ様に滅ぼし尽くすべきものとなる」（7:26）のである。

なるほど、主の約束（アブラハムの子孫への祝福）があれども、であるが故にこそ、選ばれた民の主に対する誠実の責任は重い、のである。なので、この単元で注目すべきは、繰り返しになるが、ただただ〈主の言葉への信頼〉（それはそのまま「信仰」）である。

最後の展開として、この申命記が編纂された歴史的文脈を捉えておきたい。

「なぜ、申命記は民の選びという思想を概念化したのか。最近の説では、それは北王国イスラエルの滅亡の危機と深く関連するとされる。超大国アッシリアの侵略の前に敗戦国民の生き残る条件は皆無に近い。無価値な民の選びという強烈な神の愛の論理は、しかしこうした崩壊の最中で生まれたのである。」（左近淑著『左近淑著作集　別巻　聖書研究』）

なるほど、この歴史的背景を踏まえると、イスラエルのカナン入植への時点の彼らの社会的状況（エジプトへの隷属から解放され、荒野をさまよい、ようやく約束の地に入り行く苦難の民）というものと、時代が下がって北王国の滅亡の危機に瀕した民の苦境が重なり合う。出エジプトの民においても、たとえそれが約束の地であっても、あらゆる危険・危機が予測される中で、本課のテキストである「民の選び」が告げられたことは、彼らの魂を奮い立たせ、主への信仰を確立させるものであったと思われる。またアッシリアによる侵略とそれによる亡国の只中、「無価値」（アイデンティティーの喪失）の憂き目にあった人々に、この「民の選び」の言葉（歴史的実証）が与えた激励の大きさは想像にかたくない。

「あなたは知らねばならない。あなたの神、主が神であり、信頼すべき神であることを」（7:9）――本課の中心は、そしてこのカナン入植の出来事の中心は、この信仰の確立であるのではないか。

（聖書教育より）

「申命記は、紀元前７世紀に南ユダ王国のヨシヤ王の宗教改革において見直され、編集されたといわれています。」（聖書の学び～奴隷の家からの開放）。――なるほど、宗教改革、つまりは信仰の再確立である。そのような視点で読むことが、この歴史的文脈を読み解く上で理解を助けるものとなるであろう。